

# 一乗寺向畠町遺跡発掘調査概報

昭和61年度

京都市文化観光局  
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 序

千年の歴史にはぐくまれた学問、芸術、文化、宗教の都であることをふまえながら、21世紀へ向けての理想のまちづくりを目指している京都は、伝統を生かし創造をつづける都市づくりに取組み、なかでも、2年後(昭和64年)の市政100周年事業並びに7年後(昭和69年)の平安建都1200年事業などを計画しております。

一方、都市の活性化に伴う開発に際して、埋蔵文化財を保存し、良好な環境を維持することが重要な課題となっております。

このような状況の中で、本市といたしましては、埋蔵文化財の保存について、市民の理解と協力を得る努力をいたしておりますが、保存が困難な遺跡につきましては、調査を行いその成果をできる限り後世に伝えるように努めております。

この調査報告書は、昭和61年度国庫補助事業として実施した調査の概要をまとめたものであり、本書が埋蔵文化財の研究に、また有用な資料として御活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、また御指導いただいた文化庁をはじめ御協力をいただいた関係各位並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和62年3月

京都市文化観光局

## 例　　言

1. 本書は京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に依託した、昭和61年度文化庁国庫補助による一乗寺向畠町遺跡発掘調査の概要である。
2. 調査地は京都市左京区一乗寺向畠町17—1, 19に所在し、調査期間は昭和61年4月21日から5月13日までである。
3. 発掘調査の担当者は以下のとおりである。  
調査員 平尾政幸、本 弥八郎  
調査補助員 角村幹雄、小谷 裕、高橋富之助、中津宏典、藤村俊之、藤村雅美、堀内寛昭、山口 真
4. 本書の執筆、編集は平尾が行い、写真は造構の一部を除き牛嶋 茂が撮影した。
5. 本書で使用した方位ならびに座標は、平面直角座標系VIにより、標高は海拔高(T.P.)を使用した。
6. 本書に使用した地形図は、京都市都市計画局発行の1/2500都市計画基本図(松ヶ崎)を調整したものである。

## 本文目次

1. 調査経過	1
2. 造構	2
3. 造物	3
4. まとめ	8

## 図版目次

図版一 造構実測図	図版八 造物 古墳時代須恵器
図版二 造物 SK 3出土土器(1)	図版九 造物 SK 3出土土師器
図版三 造物 SK 3出土土器(2)	図版三 造物 SX出土黒色土器
図版四 造構 調査区全景	図版二 造物 SK 3出土須恵器・灰釉陶器
図版五 造構 1. 石室 SX31 (南西から) 2. SX31床面 (北東から)	図版三 造物 SK 3出土綠釉陶器・灰釉陶器・白色無釉陶器
図版六 造構 1. 周溝 SD30 (南西から) 2. 平安時代以降の造構 全景 (北西から)	図版三 造物 石鎌・石斧・石錘・金環
図版七 造物 楩文土器	

## 挿図目次

図1 調査位置図	1
図2 西壁断面図	2
図3 楩文土器拓影・実測図	3
図4 石斧・石錘実測図	3
図5 石鎌実測図	4
図6 古墳時代須恵器実測図	5
図7 軒丸瓦拓影・実測図	6
図8 平安時代土器実測図	8

## I 調査経過

### 1. 調査に至る経過

一乗寺向畠町遺跡は京都盆地の北東部、一乗寺川の扇状地上、海拔80m前後に立地する。遺跡は南北約350m、東西約150mの範囲にわたり、縄文時代前期、後期の遺物の出土が知られていたが、昭和53年から54年にかけて実施された、下水道工事に伴う立会調査では縄文時代の遺物の他に、平安時代前半の遺物も出土することが新たに確認された。このたび当遺跡の北西の一角にある左京区一乗寺向畠町17-1および19においてビル新築の計画がたてられ、関係機関による協議がもたれた。その結果、遺構の有無を確認するため試掘調査を行うことになり、建設予定地に3箇所の試掘トレンチを設けた。この試掘の結果、縄文時代の土器を含む土層や、平安時代の遺構が発見されたため、再度協議がもたれ、発掘調査を行うことになった。

### 2. 調査の経過

調査地は西へ傾斜する一乗寺川扇状地のゆるやかな斜面を切って南北に走る白川通りに接しており、道路面とは約3mの高低差がある。調査地が狭いため、試掘で確認した遺構面までの表土約50cmを機械掘削し、場外へ搬出した後、調査を進めた。調査区は南北約20



図1 調査位置図

m、東西15mに設定した。調査の結果、横穴式石室を持つ円墳の一部、平安時代の土壌などを検出したが、試掘で確認した縄文時代の遺物を含む土層はすべて後世の二次堆積土であることが判明し、縄文時代の遺構は検出できなかった。

## II 遺構

### 1. 遺構の概要

遺構面は現表土下約50cmで、その上部に褐色泥砂(約10cm)、茶褐色泥砂(約10cm)が堆積し、さらにその上部に約30cmの耕土層がある。耕土下の2層には縄文～近世までの遺物が含まれており、遺構はすべてこれらの土層を排除した淡褐色砂層上面で検出した。遺構には古墳時代、平安時代のものがある。調査区北部で検出したS K51は、焼土がうすく堆積し、石鏡が2点出土しているが、縄文時代のものと断定し難い。

### 2. 古墳時代の遺構

横穴式石室の痕跡(S X31)と、その周溝とみられる溝(S D30)を検出した。S X31は石室攝形と床面の一部と思われるわずかな石數を除いてすべて破壊されていた。石室を構成していた石材は大部分抜き去られ、唯一残っていた花崗岩(0.8×1.0)も原位置から動いている。攝形は長さ約9.0m、最大幅約5.0mで、形状や周辺の地形からみて南西方向に開口部を持っていたと思われる。床面には30cm前後の平たい川原石が数かれていたが、原位置を保っているものはわずかである。堆積土中には古墳時代の遺物の他、縄文土器片や、平安時代、近世の土器・陶器類が含まれていた。S D30は石室南側の一部を検出した。幅約

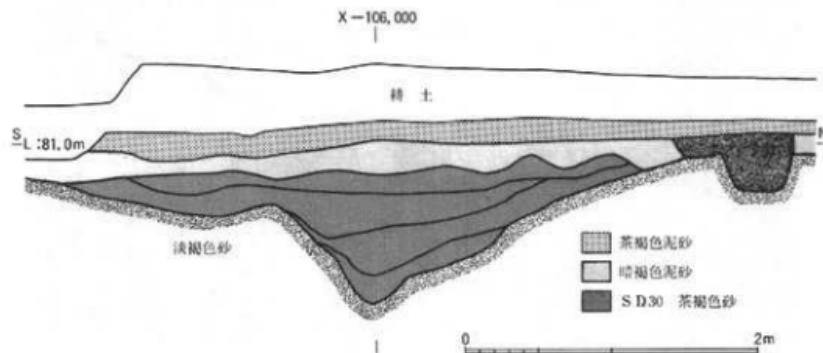


図2 西壁断面図

4.0m、深さ1.0m。溝内の堆積土は茶褐色の泥砂で、須恵器の他、縄文土器片や石鎌などが出土地した。

### 3. 平安時代の遺構

調査区南東隅に土壇(SK3)を検出した他、小規模な土壇やピットが数基ある。SK3の他は深さも10cm内外で、形状も不整形なものが多い。SK3はSD30を切って成立しており。5.5m×2.0m、南北方向に長い土壇で、平安時代前期の遺物が多量に出土した。堆積土は茶褐色の砂質土である。

## III 遺物

### 1. 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、SD30、SX31、SK3などの他、茶褐色泥砂、褐色泥砂など、すべて二次堆積土中から出土したものである。縄文土器の他、石斧、石鎌、石鏃などがあるが、総量は少なく、整理箱にして、1箱程度である。縄文土器はすべて細片で、器形のわかるものは少ないが、深鉢、浅鉢、注口土器などがあり、無文の粗製のもののが多数を占める。すべて後期に属するものである。石斧は先端部(10)および後端部(9)の破片が1点ずつ出土した。いずれも磨製で、石材は砂岩あるいは変成岩と思われる。石鎌は2点出土した。長円形のもの(11)とほぼ円形のもの(12)があり、いずれも両端に細い刻目を入れる。石材は粘板岩、あるいは粘板岩系の変成岩と思われる。石鏃は包含層、SD30、SX31、SK3などから16点出土した。長さ2.0~2.8cm、幅1.6~2.2cm。形状のわかるものはすべて凹基式で、石材はサヌカイトである。

### 2. 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物には須恵器、土師器、金環、鉄製品などがある。これらの遺物は主にSD30、SX31から出土したが、SX31から出土したものも床面直上で検出したものではなく、すべて原位置から移動しているものである。須恵器には杯蓋(29、30、33~35)、杯(31、32、36~38)、

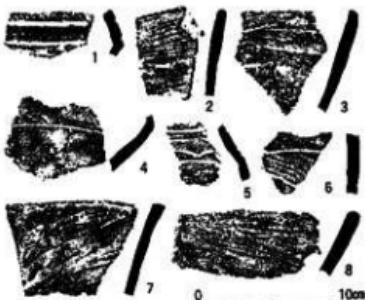


図3 縄文土器実測図

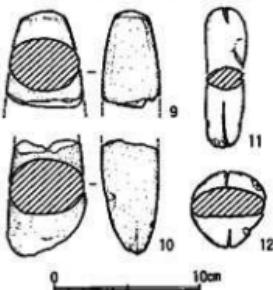


図4 石斧、石鎌実測図

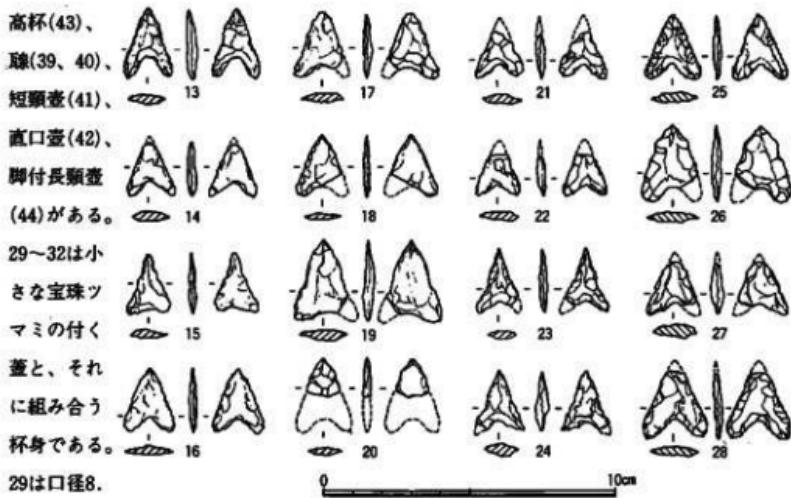


図5 石器実測図

.8cm、色調は紫がかった淡青灰色で、胎土中に細い白色の粒子が混じる。30も同型の蓋であるが、ツマミが欠失している。口径8.7cm、残高2.2cm、灰色を呈する。31は口径9.6cm、高さ3.7cm、色調は外面暗灰色、内面灰色、胎土は緻密。32は口径10.5cm、高さ3.8cm、胎土、色調ともに31に類似する。33は口径13.2cm、天井部を欠失しているが高さは5.0cm程であろう。色調は淡灰色、胎土はやや粗く、焼成不良気味。口縁部外面にキザミ目をつける。34は口径14.3cm、高さ3.9cm、青灰色を呈し、良く焼しまっている。36は口径11.2cm、高さ3.7cm、胎土は淡灰色で焼成は悪い。38は口径12.7cm、高さ3.8cm、色調は淡青灰色。胎土は細粒で均質。聴の口縁部(39)は9.5cm、頭部に沈線を2条入れる。焼成は良く、外面は暗灰色で光沢がある。聴体部(40)は最大径9.5cm、肩部に凸帯を一条その下部にキザミ目を2段巡らせる。焼成はやや甘く軟質。短頸壺(41)は口径9.3cm、高さ8.6cm。色調は暗灰色で表面は光沢を帯びる。肩部に班状に灰色の自然釉がかかる。直口壺(42)は口径7.1cm、高さ12.0cm、底部のケズリは粗い。胎土は灰色で、黒色の粒子を多く含む。高杯(43)は口径10.5cm、高さ12.0cm、脚部中程に2本の凹線を入れ、その上下に縱長の透しを3方に配する。上段の透しは脚裏面まで貫通しない。暗灰色を呈し、脚部と、杯部の裏面に自然釉がかかる。脚付長頸壺(44)は口径9.0cm、壺底部と脚の下部を欠く。口頭部と体部上半にそれぞれ2本単位の沈線を2箇所ずつ配する。口頭部の沈線間に縦方向にカキ目を施す。脚

部中程にも沈線を入れ、その上に長方形の透しを配する。色調は暗灰色～暗青灰色、断面は暗灰色を呈する。土師器甕(45)は口径9.4cm、体部外面に縦方向、内面には横方向のハケ目調整を施す。胎土は淡褐色で均質である。金環(46、47)は外径2.15～2.3cm、太さ0.38cm、表面の腐蝕がはげしく、芯材の銅が露出している部分が多い。

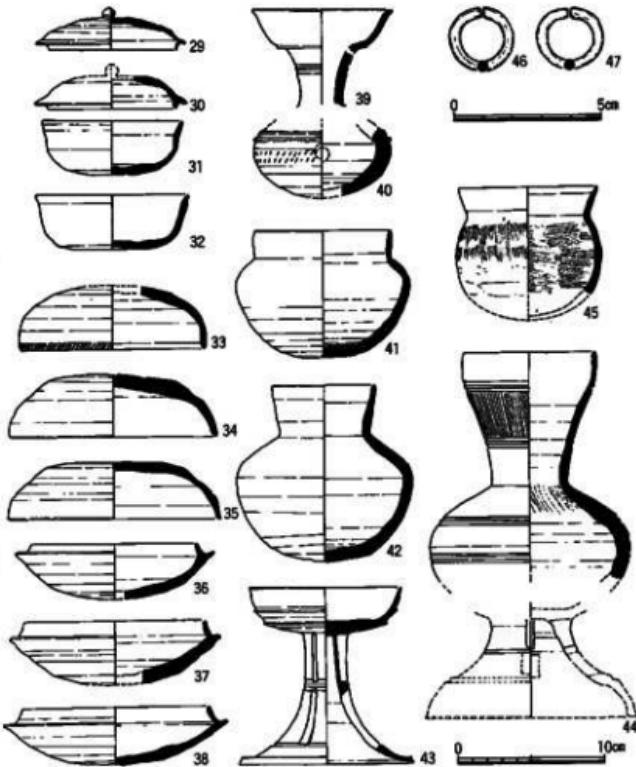


図6 古墳時代遺物実測図

これらの遺物は43、44がSD30から出土した他はすべてSX31から出土したものであるが、そのうち29～32は、狭道部付近と思われる箇所から検出した。

### 3. 平安時代の遺物

平安時代の遺物は主にSK3から多量に出土した他、SX31などからも小量出土している。SK3から出土した遺物は、軒丸瓦1点を含む少量の瓦と多量の土器類である。軒丸瓦(48)は複弁(おそらく4葉)蓮華文、中房は不明、裏面に布目が残るいわゆる一本造りである。胎土は灰白色でやや軟質、表面は黒灰色～暗灰色。土器類は破片数7298片出土している。器種別の比率は、土師器85.0%、黒色土器6.0%、須恵器1.5%、綠釉陶器0.4%、灰釉陶器1.2%白色無釉陶器5.8%である。土師器には皿、椀、杯、高杯、甕がある。皿、椀、

杯などの小型器形は、皿A I (54)、皿A II (49~51)、椀A (55~58)、杯A (60、61)の4群に分類できる一方、それらの中間的な法量をもつものもわずかに認められる。皿A Iは口径17.2cm、高さ2.3cm、皿A IIは口径14.0~14.8cm、高さ1.8~2.0cm、椀Aは口径13.4~14.8cm、高さ2.1~3.1cm、杯Aは口径15.6~16.1cm。いずれも口縁部が外反し端部を上方に小さく丸くおさめる。口縁部と内面をナデ、外面はオサエ調整。胎土は淡褐色~淡黄灰色で細粒。高杯(89)は口径29.8cm、高さ20.5cm、杯部下半をヘラケズリ、脚部は内側に芯を用いて成形し、8面に面取りする。杯部内面と裾部はナデ。胎土は淡黄灰色で細粒。甕(90)

~93)は図示したものの他に10数個体分出土したが、全形を知り得るものは2個体だけである。内外面にタタキ目を残すものや、外面のタタキ目をハケ目で消すものなどがある。90は口径22.2cm、外面は磨滅して不明だが、内面には同心円状のタタキ目が残る。胎土は淡茶褐色で良質。91は口径22.4cm、外面は縦方向の平行タタキ、内面には同心円状のタタキ目が残る。胎土は淡茶褐色で良質。92は口径23.2cm、高さ23.5cm、外面は横方向のハケ目、内面は同心円状のタタキ目をナデ消す。胎土は淡橙褐色で細粒。93は口径23.8cm、高さ20.8cm、外面は横方向のハケ目調整、内面は同心円状のタタキ目をナデ消した頸部とその付近は横方向にヘラケズリ調整。胎土は淡褐色で細粒。黒色土器には皿(62、63)、碗(65~68)、鉢(64、98)、甕(95~97)がある。皿A (62)は口径11.7cm、高さ2.4cm、内外面黒色化するBタイプ、高台は付かない。内外面ともいねいにヘラミガキする。皿B (63)は口径13.1cm、高さ2.8cm、Aタイプ、内面はいねいにヘラミガキ、外面はナデの後、粗くミガキ。椀は口径16.2~20.3cm、高さ8.3~9.5cm、いずれもAタイプで、高台が付く。内面をいねいにヘラミガキし、68以外は外面をヘラケズリの後、粗くヘラミガキを施す。68はケズリのままである。66と67には内面に暗文が施されている。胎土は赤褐色で、雲母を含む。鉢にはふくらみのある体部に小さな高台の付くもの(64)と、いわゆる鉄鉢型のもの(98)がある。いずれもAタイプ。64は内外面をいねいにヘラミガキ、胎土は暗褐色で

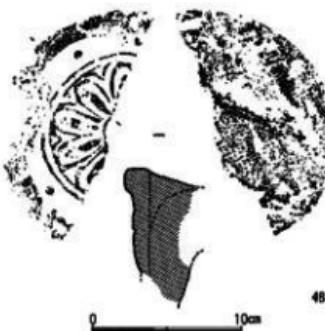
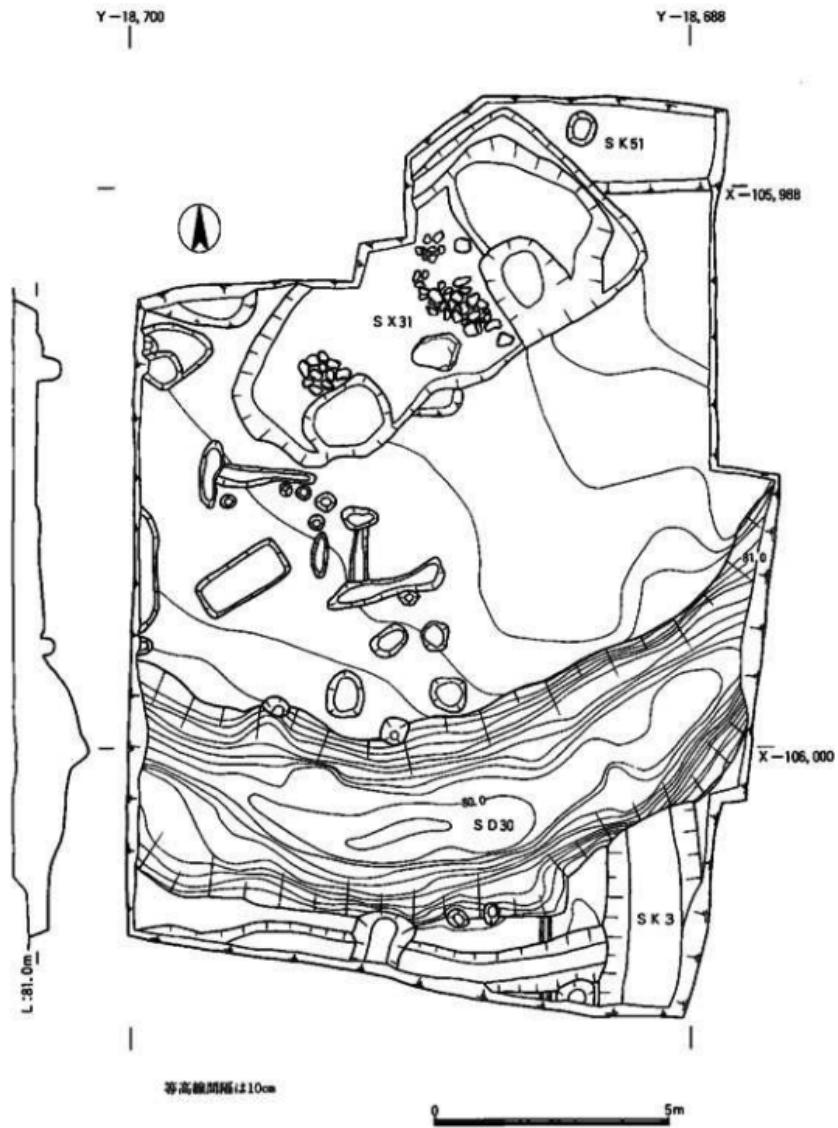
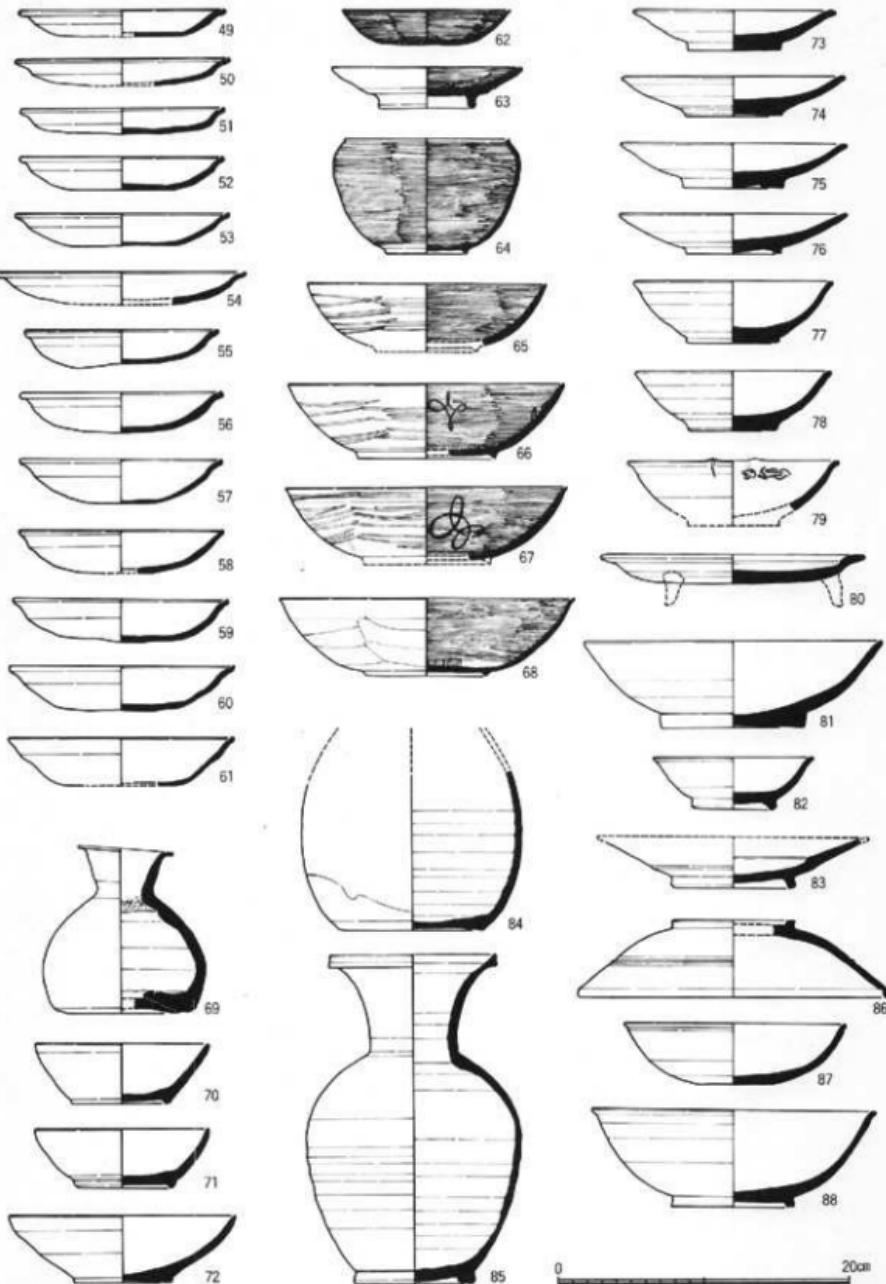


図7 軒丸瓦拓影・実測図

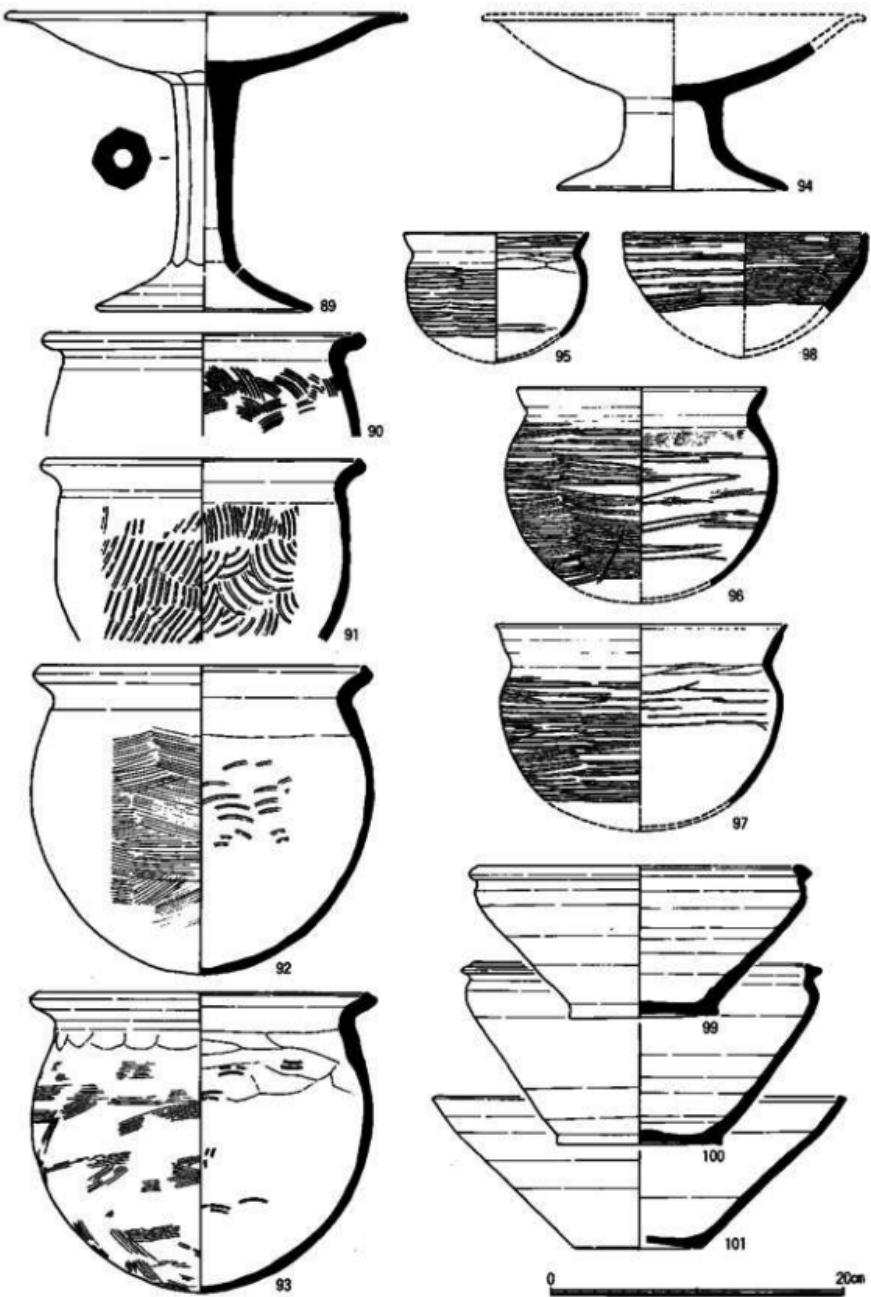
雲母を含む。98は口径16.6cm、内面に比べ外面のミガキは粗い。胎土は淡赤褐色で密。雲母はほとんど含まない。小型の壺(95)は口径12.7cm、Aタイプ。外面を横方向に粗くミガキ。胎土は暗褐色で雲母を含む。96は口径17.0cm、Aタイプ。外面のミガキはていねいで、内面はハケ目調整の後、粗くミガキ。胎土は淡灰褐色でやや砂質。97は口径20.0cm、Aタイプ。体部外面を横方向にヘラミガキ、内面はケズリ後粗くミガキ。胎土は暗褐色で雲母を多く含む。須恵器には杯、壺、鉢がある。杯(70、71)はほぼ同型。70は口径12.0cm、高さ4.1cm。71は口径12.0cm、高さ4.3cm。両方とも胎土は青灰色で緻密。72は口径15.5cm、高さ4.7cm、底部に糸切り痕を残す。胎土は淡灰色でやや軟質。壺(69)は口径6.7cm、高さ11.5cm、胎土は暗灰褐色～暗赤褐色で粒子はやや粗い。成形時のケズリの際、底部が破損したらしく、別土を貼りつけて補修した痕跡が認められる。鉢には口縁が屈曲するもの(99、100)と外上方に大きく開くもの(101)がある。99は口径23.4cm、高さ10.5cm、口縁端部が玉縁状に肥厚する。胎土は灰色で密。100は口径24.6cm、高さ12.5cm、端部は断面三角形に肥厚し、胎土は淡灰色で焼成は悪く軟質。99、100ともに底部外面に糸切り痕が残る。101は口径28.2cm、高さ10.5cm、胎土は淡青灰色で密。縁輪陶器には蓋、椀がある。蓋(89)は口径21.2cm、高さ5.3cm、天井部に環状のツマミ、体部中程に突帯を一条、削り出しでつける。釉は淡緑灰色で全面にかける。胎土は淡灰色で硬質。無高台の椀(91)は口径15.1cm、高さ4.2cm、外面口縁端部下方にゆるい凹線を一条巡らせる。釉は緑灰で、全面にかける。胎土はやや粗く、灰色で硬質。椀(90)は口径19.5cm、高さ6.7cm、底部は削り出しの輪高台。釉は緑灰色で全面にかける。胎土は灰色で硬質。灰釉陶器には椀、段皿、壺類がある。椀(82)口径11.1cm、高さ3.7cm、釉はほとんど発色していない。胎土は淡灰色で密。段皿(83)は口縁部を欠失している。高台径8.5cm、体部内面に段が付く、釉の発色は悪く、灰色で光沢がない。胎土は淡灰色で焼成は悪い。84は底径9.8cm、上部を欠失しているが、形状からみてあるいは把手付の瓶かと思われる。底部外面に糸切り痕を残す。外面体部下方を除き淡緑灰色の釉がハケ塗りで施されている。胎土は淡灰色で精良。85は口径11.4cm、高さ22.8cm、体部外面下半をヘラケズリ。釉は口縁部内面と肩部にハケ塗りで施され、淡緑灰色を呈する。無釉の部分は淡褐色を呈する。胎土は淡灰～淡褐色で小さな砂粒を含む。白色無釉陶器には皿、椀、三足盤、高盤がある。皿(73～77)は口径14.0～15.7cm、高さ2.8～3.1cm、底部の成形技法は、削り出しの平高台、糸切りで未調整、削り出しの蛇ノ目高台、削り出しの輪高台の4種の他に貼り付けの輪高台のものが1点ある。ほとんどのものが器面をヘラミガキするが、底部糸切りのものにはミガキはない。胎土は淡灰～淡黄灰色で、やや軟



造構実測図



S X 3 出土土器(1) 土師器：49～61，黑色土器：62～68，須惠器：69～72，  
白色無釉陶器：73～81，灰釉陶器：82～85，綠釉陶器：86～88



SK 3 出土土器 土師器：89～93，白色無釉陶器：94，黑色土器：95～98，須惠器：99～101



調査区全景（北から）



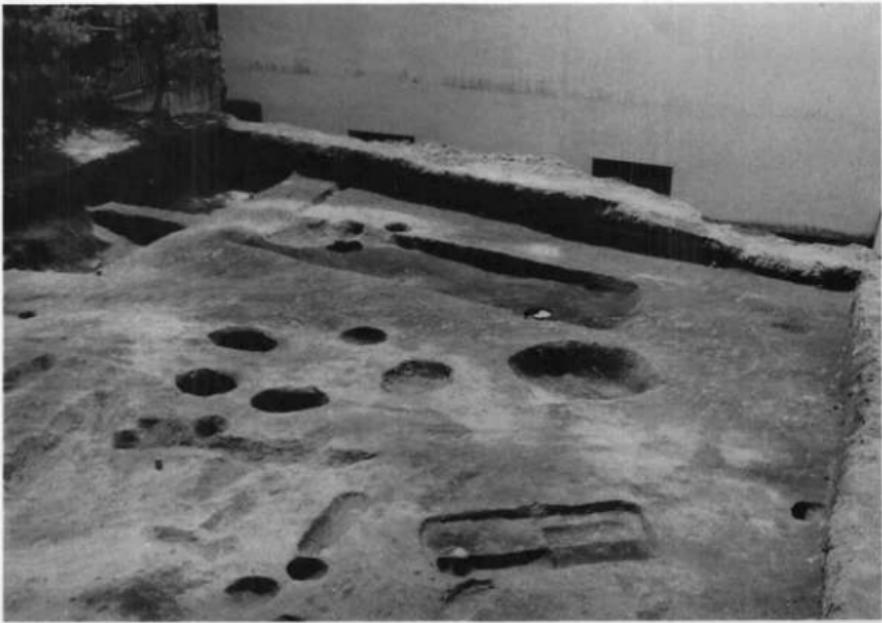
石室 S X31 (南西から)



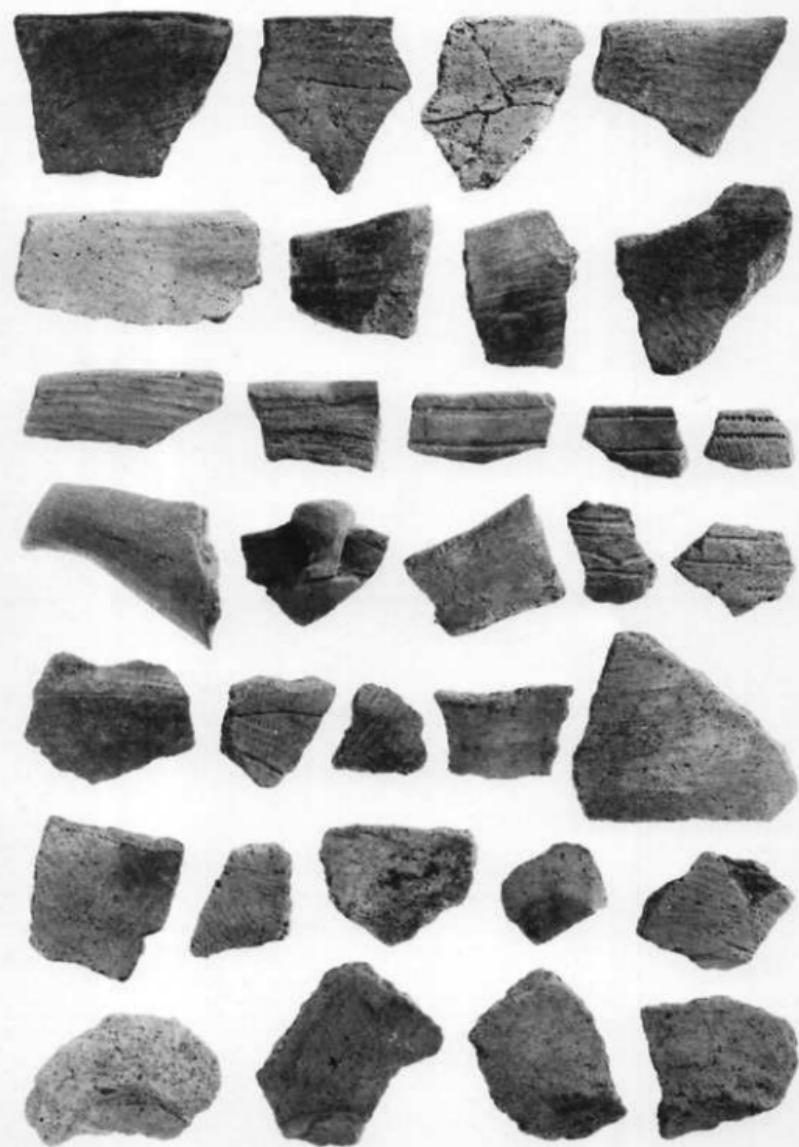
S X31床面 (北東から)



周溝 S D 30 (南西から)



平安時代以降の遺構全景 (北西から)



縹文土器



古墳時代須恵器



51



55



89



56



58



93



59



60



92

S K 3 出土土師器



62



63



98



66



95



68



64



96

SK 3出土黑色土器



70



101



71



69



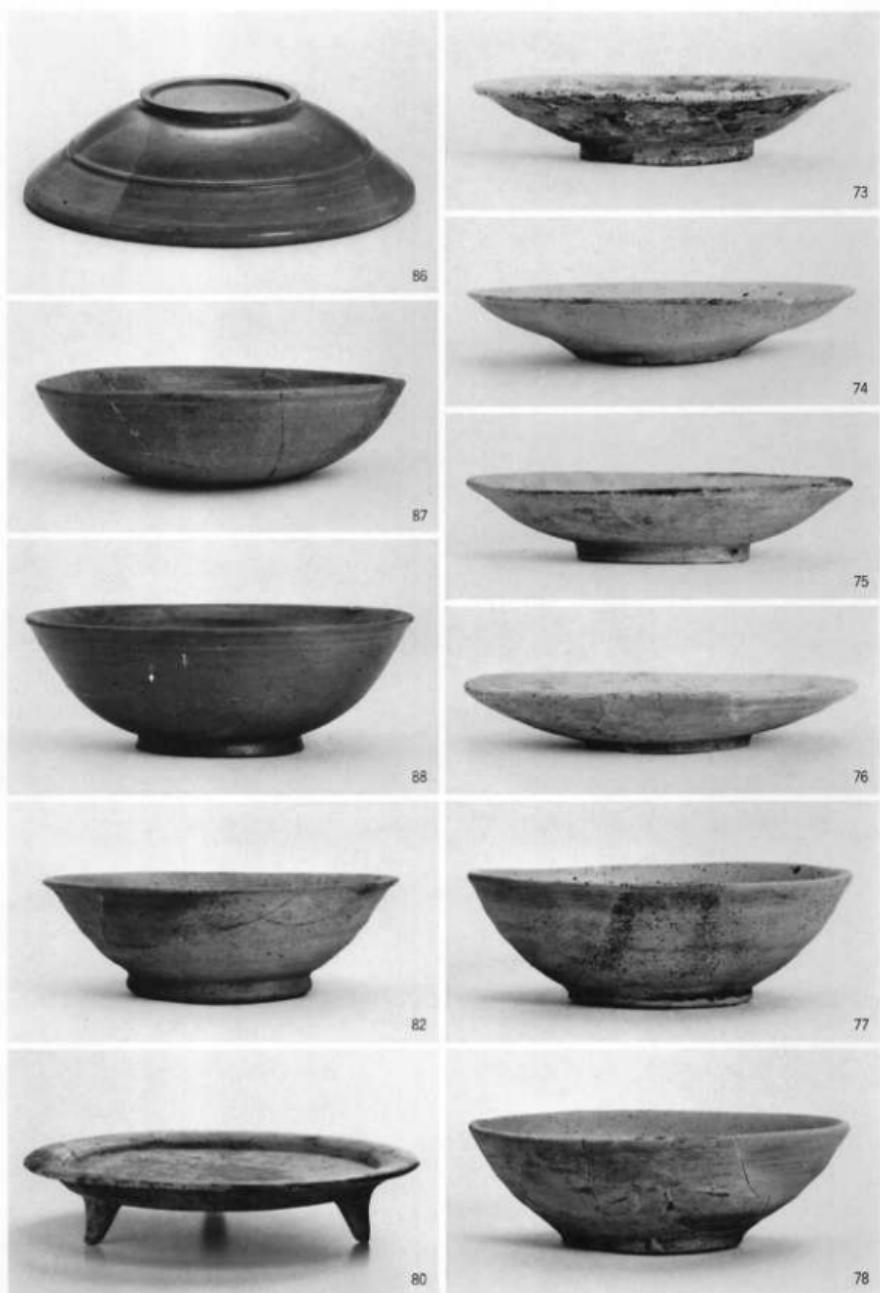
99



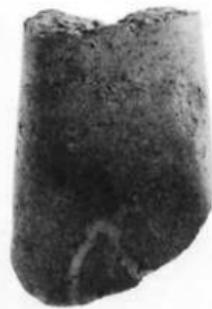
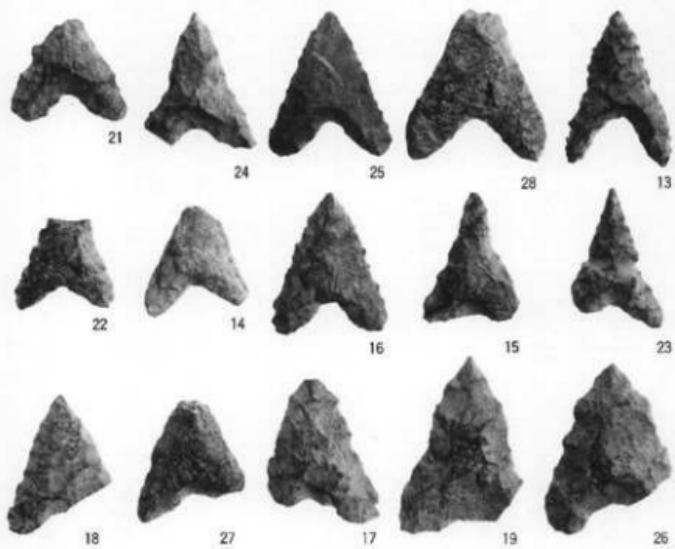
100



85



S K 3 出土綠釉陶器、灰釉陶器、白色無釉陶器



石鑽・石斧・石錘・金環

## 一乗寺向畠町遺跡発掘調査概報

昭和61年度

発行日 昭和62年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財團法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町  
TEL (075) 415-0521

印刷 真陽社